

「一人の正しい人が世を救う」井上隆晶牧師

エレミヤ書 5 章 1～6 節、ローマ 5 章 18～21 節、ヨハネ福音書 1 章 14～18 節

①【一人の正しい者がいたら滅ぼさない】

今日は収穫感謝祭です。私たちは自分だけで生きることが出来ません。動物の命、植物の命を食べて、私たちは自分の命をつなぎます。だから私たちの体の中にはたくさんの命が入っているのであって、自分だけの命ではないのです。それらを創造し、人に与えて下さった神様に感謝すると共に、自然に感謝したいと思います。さて、今日はエレミヤ書から学びます。エレミヤは、南王国ユダが滅亡する前後に働いた預言者で、悲しみの預言者と言われます。

5 章の 1 節に「エルサレムの通りを巡り、よく見て、悟るがよい。広場で尋ねてみよ、ひとりでもいるか。正義を行い、真実を求める者が。いれば、わたしはエルサレムを赦そう。」と主は言われます。人間は広場や通りにも大勢いるが、本当に神を恐れ、真実を求める人はいるだろうか、と尋ねたが誰もいないというのです。そしてもし、そのような一人いたら、神様はエルサレムを赦すと言われました。ここを読むとソドムとゴモラの町を思い出します。神様はソドムとゴモラの町を滅ぼすことにしました。しかしソドムの町にはアブラハムの甥ロトが住んでいました。そこでアブラハムは神様に「あなたは正しい者を悪い者と一緒に滅ぼされるのですか。…全世界を裁くお方は、正義を行われるべきではありませんか。」

（創世記 18 : 23、25）と言って談判し、50 人正しい者がいたら、45 人いたら、40 人いたら、30 人、20 人、10 人いたらと、町の救いのために執り成しました。神様は「10 人のために私は滅ぼさない」（創世記 18 : 32）と約束をして下さいましたが、結局滅んでしまいました。正しい者が 10 人いなかったからです。

●榎本保郎牧師はこう書いています。「本当のキリスト者が日本に一人いるなら、日本を支え、日本を守る。それはどんな軍備や、予算をもって日本の防衛にあたるよりも、もっと確かな日本の守りとなるのである。…一人の責任は非常に大きい。大勢の人たちよりも、一人がどうであるかを神は見ておられるのである。…軽い砂が海と陸との境界を守っているように、神の約束は人に軽いようでも永遠不変である。」

世の悪を問いたす前に、あなたは神の前に本物の信仰者かどうか問われているのです。

②【一人の人が群れ全体を滅ぼし、また群れ全体を救う】

聖書では、救いというのは個人のものではなく、全体（連帯として）で考えられています。たとえば旧約時代にアイという小さな部族を攻めた時、イスラエルは大敗北をしました。アカンという一人の人が、滅ぼし尽くしてささげるべきものの一部を盗み取ったからです。（ヨシュア 7 : 1）一人の罪によって、群れ全体が

罰せられたのです。同じように一人の信仰者が、群れ全体を救うのです。パウロはこう書いています。「そこで、一人の罪によってすべての人に有罪の判決が下されたように、一人の正しい行為によって、すべての人が義とされて命を得ることになったのです。一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって多くの人が正しい者とされるのです。」（ローマ 5:18）一人の罪、一人の不従順というのはアダムのことです。一人の正しい行為、一人の従順というのはイエス・キリストのことです。実際、正しい方はただ一人イエス様だけです。この一人の方によって世は守られており、私たちは救われるのです。プロテスタント教会では個人の信仰を重視します。ですから個人が聖書を読み、信仰を持たなければ救われません。そうすると信仰告白できない幼児とか重度の知的障がい者とか、認知症の人などは救われないことになります。ルターは「万人祭司」ということをいいました。理想としては素晴らしいですが、現実的には無理でしょう。皆がコルベ神父になれるでしょうか。皆がマザー・テレサの働きが出来るでしょうか。決してできません。彼らは生まれる前から選ばれた人であり、使命が与えられ、それを全うする賜物をいただいて生まれてきた人たちなのです。彼らは自分の為ではなく、多くの人の代わりに善行を行い、キリストを証し、信仰を守り抜き、多くの人の救いを祈り、自分自身を献げたのです。それはキリストの働きを世に現すためです。

●19世紀のクロンシュタットの聖イオアン神父はこう書いています。

「魂が平安で、自分自身が信仰と神を敬う心に堅く立っていれば、その時、委ねられた羊の群れも堅く信仰に立ち、清い生活を行い、魂の平安を保つことができます。頭が明るく清潔であれば、その肢体も明るく清潔でありましょう。反対に、私たちの魂が、この世的な願望などで覆われていると、委ねられた羊の群れも暗黒に包まれることになります。なぜなら、頭と肢体、牧者と羊の群れとの間には、それほど緊密な関係、間柄があるのですから。」

だから教会の指導者の責任は重大です。群れ全体に影響を与えるからです。私たちは一つの体なのです。キリストが頭であり、教会はその肢体です。必ず影響し合うのです。キリストが全人類を支え、キリストに似た人が、小さな群れを支えるのです。あなたの信仰の姿勢は必ず他者に影響を与えることを忘れないようにしてください。

③【人が変わらないので神が変わった。神だけが人を救える】

エルサレムの人たちは、いくら懲らしめを受けても学ばず、ますます頑固になって神に帰ることをしませんでした。身分が低い者も、高い者も同じで「主の道」を歩まず「軛を折り、綱を断ち切った」とあります。ここでは神様に縛られることは嫌だと言って、関係を断ち切ったということです。私はエレミヤ書を読みながら思いました。「イスラエルの民はどうしてこんなに頑固で、物分かりが悪く、

不従順なのだろう。奇跡を体験してもすぐに神を忘れ、聖書をいくら研究しても、イエス様を受け入れなかった。これはひどい民だ。でも、もしかしたら私たちも同じなのではないだろうか。イエス様の弟子たちもイエス様が死ぬまで誰が一番偉いかと議論していたではないか。今のロシアはどうだろう。キリスト教徒が大勢いるのに戦争をし、神様の戒めを守らないではないか。アメリカもキリスト教徒が大勢いるのに、黒人差別をするではないか。」私の出した結論はこうです。「人間はいくら聖書を学んでも神の戒めを守ることは出来ず、神に従うことはできない。無力なのだ!」ということです。

●今、心の病の勉強会で「引きこもり」について学んでいます。当事者は、引きこもることで自分の身を守っているのであって「自立しなさい」と言うのは、本人を追い詰めることになります。だから家族と顔を合わさないようになります。本にはこう書かれています。「親は…仕事をいつからするのか、将来をどう考えているのか、親が死んだ後どうするつもりか、などの正論あるいは説教を言わないということだ。」これはカルト宗教からの脱会についても同じでした。決して「辞めなさい」と言うてはいけないのです。正しいことを言っても本人は辞めないからです。いくら正論を言っても、引きこもりも治りません。

なぜ、私たちは正論を言うのでしょうか。正しいことを言えば相手は変わると思っているからです。この考えが碎かれることが必要なのです。私は一人の人を25回訪問して話をしても、その方がカルトから辞めなかった時に、自分の無力さを知りました。だから最後の日には、説得や学びをせず、雑談をして帰りました。するとその夜に神の霊が働いてその方は脱会したのです。人は人を変えることも、人を救う事も、この世を変えることもできません。それは人間だけでは不可能なのです。それを認めることが必要です。人が変わらないので、神が変わったのではないのでしょうか。神が人となり、十字架で人の罪を負って死ぬしかなかったということなのです。神の独り子が死ななければ弟子たちも、聖霊を受けることが出来ず、聖霊が来なければ変わることができなかったのです。パウロも聖霊を受けて変わりました。人の力だけでは変われなくても、神の力が働くことによって人は変わるのです。これが私の出した結論です。

●作家の三浦綾子さんが本の中でこう書いています。「イエス・キリストがかけられたあの十字架というのは、言ってみれば、人間に対する神の絶望を意味しているとわたしは聞いたことがあります。…イエスの死というのは、人間に対する神の絶望と神の愛が示されているということなのです。」

今日は収穫感謝祭です。あなたは神様の天国の倉に入れられる良い実を結ぶ人になっていますか？神様の力がなければ、私たちは良い実を結べないのです。是非、神に祈り続け、信仰と行いの良い実を結ばせてもらいましょう。